

最推しの義兄を愛でるため、
長生きします！

6

オルシス・
ソル・サリエンテ

義弟であるアルバを
変わらず溺愛中。
多忙につき、アルバにあま
り会えないことが少し悩み。

アルバ・
ソル・サリエンテ

転生したら最推しが
義兄になっていた。
忙しい兄様を癒すため、
お帰りのハグをがんばっている。

ルーナ・ソル・
サリエンテ

アルバの妹。実は
とっても優秀！ブルーノの
研究をよく手伝っている。

ブルーノ

アルバの妹、ルーナ
の婚約者。
サリエンテ家を見守っている。

セドリック

ミラの義弟にして、
アルバの親友。
アルバの規格外に
驚きつつ、
隣に立ち続ける。

ヴォルフラム・
サン・テスプリ

テスプリ王国の国王。
ミラ王妃に
振り回されつつ、
溺愛している。

ミラ

庶民から王妃になった。
懐妊の報せが国を
騒がせている。

……疲労が頂点に
達したかもしれない……
アルバの幻覚が視える……

少しでも
心安らかに兄様が
眠れるようにと、
「お迎えしました」

目次

最推しの義兄を愛でるため、長生きします！ 6

7

番外編 大きくなった我が息子たち

331

最推しの義兄を愛でるため、長生きします！

プロローグ

『光凛夢幻∞デステイニー』——お気に入りの攻略対象者と共に、能力を上げて最終的に国を救う、そんな乙女ゲーム。そのゲームの中で、『フオネン病』という不治の病^{やまい}によって命を落とす、『最推し』にとって思い出の義弟』として転生した俺、アルバ。

最推しであるオルシス様……兄様と、もう一人の攻略対象者であるブルーノ君と出会った俺は、二人の努力の末、ゲームのセンターを張っていたツヴァイト第二王子殿下も巻き込んで、フオネン病を克服した。

しかし、そんなこんなの中で、俺が実は『刻魔法』という特殊な魔法属性を持っていたことが判明してしまう。

その魔法で見たのか前世の記憶を覚えていたのかわからないけれど、俺は兄様と共に、まるでゲームのストーリーのようにこの国を救ってしまった。

結果として、『思い出の義弟』となることなくすくすくと育ち、俺はどうとうゲームの舞台である王立ソレイユ高等学園に入学することができたのだった。

ゲームの中では表情筋が死滅していた兄様は、いつでも蕩ける^{どろ}ような素晴らしい笑みを浮かべる

ようになり、最高に美麗でかつこい兄様に成長した。

さらに紆余曲折^{うよくせつ}の末俺の婚約者となり、今は隠し攻略キャラでこの国の王となったヴォルフラム陛下の側近として日々を過ごしている。

ちなみに王妃となったのは、ゲームでは主人公だった、庶民出身のミラ嬢だ。

本来だったらずでに天に召されていたはずの俺は、最推しが活動した高等学園で学生生活を謳歌しながら、『魔術陣技師国家資格』に合格し、国直属の魔術陣技師となった。これで、学園が長期休みに入ったら兄様と一緒に王宮に通える！ 今から脳内がフィーバー中だ。

セドリック君とジュール君は相変わらず俺と仲良くしてくれて、何くれとなく気にかけてくれている。

友達もできたし、最推しオルシス兄様とこ、こ、婚約もできて、人生を楽しみまくっている俺だけれど、この国周辺は、なかなか落ち着いていない。

我が国——テスプリ王国は、守護宝玉に魔力が満たされて、立ち直った。

けれど、この国に隣接する二つの国にある守護宝玉の魔力もまた、枯渇に近い状態になっていることが判明している。

一つはこの国の西側にあるブルーニユ王国。

もう一つは、この国の南側に位置するドローワ王国だ。

俺はある日、ドローワ王国とテスプリ王国の国境にあるダンジョンから、ドラゴンの魔物があふれ出して我が国を襲うという映像を『刻魔法』で視てしまった。

それをヴォルフラム陛下とミラ妃殿下に伝えたところ、乗り気になったのは他でもないミラ妃殿下。誰よりも男前だと思っていて妃殿下は、行動もまた男前だった。

「私が行くのが一番手っ取り早いわ」

女性、しかも今やこの国で一番尊い女性となったミラ妃殿下は、そう言ってさっさとドラゴンの闊歩するダンジョンへ向けて出発した。

兄様がドラゴンを倒す雄姿が見たくて、俺も一緒にについていくことにした。そうしたらセドリック君も「アルバは僕が守るからついていきたい」と挙手をして……

結果、このドラゴンダンジョンはセドリック君と、巻き込まれたジュール君のレベル上げの場となった。

このダンジョン、ゲーム内では一度メインのストーリーをすべてクリアしないと出てこないばかりか、そこら辺を闊歩している雑魚ドラゴンがまあ強いんだよ。そして最奥で待っている大きなドラゴンは、その時に選んだ攻略対象者にとって、最も相性の悪い属性で登場する。

ミラ妃殿下とくつついたのは、閼属性のヴォルフラム陛下。

ストーリーで言えば、攻略対象者はヴォルフラム陛下ということだ。

だからてついきり閼属性のドラゴンが出てくると思っていたのに、俺は目の前に現れたドラゴンが氷属性だったことに動揺してしまった。

——氷属性は、最推し^{にいさま}の属性だから！

そんな俺を『だって宝玉に魔力を入れたのはお前とオルシスじゃないか』とブルーノ君が一笑に

付したことで動揺は収まったけれど。

ラスボスのドラゴンは、ミラ妃殿下とブルーノ君、そして氷属性と相性抜群のアドリアン君の三人によってサクッと討伐された。

ラスボスのドラゴンが魔素に還り、増えまくった雑魚ドラゴンは兄様が無双して倒した。

つまり、ドラゴンダンジョンのMVPは兄様。

本当にかっこよかった。この世の者とは思えないくらいに美しく、気高く、それでいて強く……というの置いておいて。

ドローワ王国と、我が国からドラゴンの脅威は去った。

俺の視^みた『刻魔法』によるドラゴンの襲撃は、イケイケのミラ妃殿下により回避された。

そんな中、国中を揺るがす重大ニュースが報じられたのだった——

一、国の重大発表

『ミラ王妃殿下がご懐妊』

そのことが報じられたとき、国はお祭り騒ぎとなった。

市井^{しせい}の出で、魔力がとて多い光属性の少女が王家に見初められ、王妃となる。

その王妃は、陛下ととても仲睦まじく、善政を敷いている。

まるでどこぞの歌劇のような内容に加えて起きた、更なる慶事。

誰よりも盛り上がったのは、市井^{しせい}の女の子たちだったという。

そして何やら俺たちの学園に入りたいという女の子たちの問い合わせが殺到したようだ。兄様たちが疲れ切った顔をしていたので、捌^{はく}くのが相当大変なんだろうと思う。

今年から市井^{しせい}からの生徒の受け入れも試験的に始まったからね。

ここに入って貴族と仲良くなれば貴族夫人も夢じゃない、なんて夢を見てしまった女の子たちが沢山いたようだ。

それはそれでちょっと問題のような気がする。

サリエンテ邸の温室で勉強をしながらそう思っていると、フレッド君が苦笑気味に付け加えた。

普段街を歩かない俺には、王都がどんな様子かいまいちわかっていなかったんだけど、ご近所に住む女の子たちが勉強に力を入れ始めたそうだ。

今まではどうせどこかに嫁に行つてそこで一生を終えるんだから、と読み書き計算をさらっと覚えるくらいしかしなかったのに、市井^{しせい}の学校では今や女の子の勉強フイバーが起こっているそう。それを聞いた時、俺は思わず「そっかあ……」と声を上げてしまった。

国内の学力が底上げされるのはとてもいいことなんだけど、理由がそれでいいんだろうか。

……まあ、俺もすべてのやる気の源が兄様だから人のことは言えないんだけど。

でも兄様の周りに綺麗な女性が増えるのは、ちょっと怖いかも。

俺はちらつとフレッド君を見た。

「……もしかして、嫁ぎ先を探すことが目当ての女の子が入ってきちゃったりもするのかな」

「するでしょうね。隣の家のアンナなんて二年後絶対受験するって鼻息荒くしていたらしいですから」

目の前でレポートをめくり、文字を目で追いながら、フレッド君が即答する。

俺は膝にルーナを、隣の椅子にルフト君を座らせて、一緒にお勉強中なのだ。

「そっかあ」とお返事をしながら、俺は読んでいたレポートをテーブルに置いた。

今ちよつと憂鬱になったのは、そんな話だけではない。

目の前に置かれている課題への不安もある。

覚えの悪い俺の頭は、日々ちゃんと予習復習しないと何一つ身につかないのだ。

そんな泣き言をフレッド君の前で溢したら、すつごく意外そうな顔をされてしまった。

「ジュール様もアーチャー様もアルバ様を大変優秀とおっしゃっていましたので、なんでもスツと覚えてしまわれるのかと思いました」

慌てて首を横に振る。

「それはブルーノ君です。ブルーノ君は一度読んだら全部記憶できますからね。羨ましいものです……あ、でも僕の脳味噌の許容量は小さいので、記憶できたって焼き切れちゃうでしょうけど」
もう少し立派な頭脳が欲しかったです……と呟くと、フレッド君が笑いながら「立派な頭脳って

なんですか」とツツコんできた。

最近こうして気安く話をしてくれるのが楽しい。

思わずふふふ、と笑うと、ルーナも顔を上げて微笑んだ。

ああ、かわいい。俺の妹はとってもかわいい……

それからすぐルーナは、俺の手元にあるレポートを覗き込んで、何やら文字を目で追っている。内容を理解してるのかな？　してるんだったら、確実に天才だ。

視線を隣に送ると、ルフト君はニコニコしながら一生懸命お菓子を食べていた。

ルフト君はラオネン病を発症していたけれど、特効薬であるレガーレ改を食べたことで無事に病を克服した。

今のところ、魔力暴走もなく、毎日穏やかに過ごしていてホッとする。

ただ、彼も俺と同じく『刻属性』の可能性があるのだ。

一応ルフト君が何かを見たら、それはヴォルフラム陛下に必ず教えることになっている。それは俺と一緒に。そして俺やルフト君の視た内容を周りの大人たちがまとめ、情報を精査して、それによって導き出される事象がある程度絞り込んで回避、もしくは備えるために行動することになっている。

とはいえ、ある程度大きな災害はもう解決しているから、細々なだけだね。

竜の群れもミラ妃殿下先頭に蹴散らしてきたし。

俺も小さな竜の鱗をたくさんGETできてホクホクだ。

小さくても魔力は込められるようなので、ツヴァイト閣下が光属性の付与魔法を使ってアミュレットを作ると息巻いていた。付与魔法凄すぎる。俺もあとで習おうと心に決めている。

その時、ふと気がつくと温室の入り口が開くのが見えた。

そこから麗しの兄様が入ってくる。

「兄様！」

温室の中の柔らかい日光を浴びる兄様は今日も麗しく、ほんの少しだけ疲れの滲むその顔が俺と目が合った瞬間微笑に変わる。その表情があまりにぐつときて、これは駆け寄るしかないよね、と俺は立ち上がって、兄様を迎えに行った。

そんなこんなで、無事何事もなく、冬のパーティーを迎えることができた。

学園の行事の一つで、修了式と卒業式の前にある、お疲れ様会のようなものだ。

卒業のお祝いも兼ねているから、卒業生がメイン。

一学年、二学年がまず会場に入り、ホールの中央を花道として、左右に分かれて席に着く。そんなスタンバイが終わったところで楽団の生演奏が始まる。

そこから、着飾った最上級生が入場を開始し、俺たち下級生は拍手で迎えるのだ。

今回初参加の市井の生徒たちは、しっかりと学園から礼服を借りてお洒落している。フレッド君を含む五人ともガチガチに緊張している様子だ。

小さい声で「汚したら弁償できない……」と呟いたのは、トミイ君だ。

青くなっている彼の気持ちがわかってしまった俺には、まだきつと庶民感覚を忘れていないんだと思う。わかるよ……俺も、いまだにぞわつとするもん。

ぎゅっと手を握って心の中で応援していると、新しい生徒会長が壇上に上がった。彼が代表で最上級生をもてなし、お祝いの言葉を添える。

前生徒会長がそれに応えて、パーティーが始まった。

ちなみに、このパーティーには学外の人間は参加できない。だから高等部に入る前の俺は兄様たちが参加していると知っていても、血涙を流しておうちでお見送りとお出迎えしかできなかった。

その時の兄様の服はもちろん、俺デザインだ。

あまり華美ではないように色や生地を抑えつつ、上品さと美麗さを損なわない刺繍。

兄様を最高に輝かせる礼服を作り上げたんだ。

そして今、俺が身に着けているのは、その色違いのおそろい。兄様の似合う色は正直俺には全く似合わないの、色違いのおそろいしかできないんだ。兄様を飾るための装飾なんだから、俺には似合わなくてなんの問題もない——うん。溜息しか出ないよね。

学園長や生徒会長たちの挨拶も終わり、全員が飲み物を手にする。

そこで、奥の扉が開いた。

皆が注目し、入ってきた人物に皆が息を呑む。

俺もびっくりして目を見開いた。

演奏が最高潮に盛り上がり、中央を歩いてくるのは、ヴォルフラム陛下とその腕に手を添えるミ

ラ妃殿下。

そしてその後ろにいるのは、ツヴァイト閣下と——麗しき側近の制服を着た兄様！

あまりの神々しさと神がかった美しさに、眩暈がしそうだった。

兄様のお姿に一人アワアワしていると、隣にいたセドリック君がまったく……と呆れたように囁いた。

それから普通ぐらいの音量で、セドリック君の声が耳に届く。

「妃殿下、どうしても市井の奴らを応援したいって、陛下に我が儘を言ったらしいよ」

遮音の風魔法を展開してみたんだ。横を向いてもセドリック君が声を出しているようには見えない。その言葉を聞いているのは俺のみ。

俺はできるだけ声を潜めて、それに返事をした。

「そんな、今一番大事な時なのに。体調は、大丈夫なんでしょうか……」

「最近公務を少しお休みしているようなんだけどね。体調が優れないからって。陛下の方が真っ青になって妃殿下を気遣っていたよ……それなのにこんな無茶をするんだから」

「ヴォルフラム陛下はお優しいですもんね。きつとミラ妃殿下の願いは叶えたいんでしょうね」

「違うんだよ。妃殿下がお腹に大事な御子がいるっていうのに動き回ろうとするから……市井では生まれる直前まで働くのが普通だとかなんだとか言ってる」

「なるほど……」

陛下の心労、凄そうだなあ。

でも大人しく寝ている妃殿下を想像することもできない。誰よりもアグレッシブな方だからね。そうなると兄様とツヴァイト閣下の心労もまた……

「……兄様が最近お疲れの意味がわかった気がします……」

思い出されるのは、この前へろへろで帰ってきた兄様の姿。きつとあの調子の妃殿下に振り回され続けているんだろうなあ……

俺が遠い目を見ると、セドリック君が肩をすくめた。

「まあ、妃殿下もさすがに、自分にしかできない仕事に絞ってはいるみたいだけど、まだまだ王宮は人手不足だからね……僕も卒業したらしばらくは父の下で勉強だけど、さつさと卒業して手を貸したい……」

はあ、と溜息を吐いてから、セドリック君は風魔法を解除した。

正面では、キラキラの陛下と妃殿下が優雅に立ち、俺たちを見下ろしている。

皆は固唾^{かたず}を呑んで、陛下たちに注目していた。

普通はこういうところに陛下が顔を出すなんてあり得ない。今年は王族もないし。セドリック君は妃殿下の義弟だけど、さすがにそれだけでここに来ることなんてあり得ないはずだ。

陛下の後ろに立つ兄様に視線を向けながらそんなことを考えていると、兄様とバッチリ目が合った。

兄様の目がスツと細められる。

口元は変わらないのに、目線だけで兄様が嬉しそうなのがわかってしまい、蕩^{とろ}けそうになる。

無表情の喜び……！ それもまた、尊い……！

悶えている間にも、ヴォルフラム陛下の素晴らしい言葉が紡がれていく。

陛下が取り入れた制度で学園が変わったか、そして皆が成長したかどうかを視察に来た、とのこと。

取り入れた制度というのは、市井^{しせい}の子を学園に入学させるという試みだ。

前に会った時に五人の成績を見たヴォルフラム陛下は、「これからも取り入れて良さそうだな」とまんざらでもなさそうだったので、そのことを言いに来たのかもしれない。

でもねえ、市井^{しせい}では男子よりも女子が、シンデレラストーリーを夢見て勉強を開始しているって言うてるから、ちよつと陛下たちの思惑とはズレちゃってる気がしないでもない。でも、俺が気付くくらいだから、兄様たちも気付かないはずがない。

それ込みで国の役に立つのなら、絶対にやるべきだ。

「——まだ一年目の試みなので、皆も戸惑っていることと思う。しかし、身分関係なく、我が国民はすべて私の宝。得がたいものだ。皆で協力し、切磋琢磨し、私を支えてほしい」

フワリと笑う陛下に、生徒たちが盛大に拍手をする。

ミラ妃殿下は、優雅に微笑んで立っている。

けれど、目力が何やら凄い。

陛下の言葉は柔らかいのに、隣の妃殿下の雰囲気で、「いじめとかしやがったら承知しないぞ」と言われている気分になる。そんなことを思うのは俺だけだろうか。

一瞬、ミラ妃殿下と視線が交わり、ニコ！と笑われる。
俺はドキッとしつつ、頭を下げる。

ヴォルフラム陛下が言葉を続けた。

「卒業する者、おめでとう。これからは、学園で培ったその力を思う存分ふるってほしい。そして、在学生たち、君たちは残りの学園生活で、大いに学び、大いに楽しむよう。学園で得た友人は、尊いものだ」

陛下はチラリと横を向き、ツヴァイト閣下と兄様に目配せした。

ツヴァイト閣下と兄様がその視線を受けて、頼もしく頷く。

それが二人から陛下への信頼の証のように見えて、俺は思わず手を合わせて天に祈りを捧げた。
学園の、学生しか参加できないパーティーで、こんな尊い兄様のお姿を拝見できるなんて、来年も頑張ろう。大いに頑張ろう。

——そんなことを思っている間に、陛下たちは壇上から降り、控えの間の方に向かって行ってしまった。

あああ、尊い姿がなくなってしまった……

がっくりしていると、隣にいたセドリック君が俺の肩をトントンと叩いた。

「アルバ、陛下たちの控え室に行くけど、アルバはどうする？ そっちで合流する予定だったんだ」

「もちろん行きます」

食い気味に答えて、セドリック君と共にそっと会場を抜ける。

少し離れたサロンの方に陛下たちは向かったらしい。そこで例の超豪華な食事をして王宮に帰んだそう。セドリック君は、そのサポートを生徒会長に依頼されたから陛下たちの行動を把握していたんだって。さすが。

回廊を歩く中でそう言うと、セドリック君は照れくさそうに胸を叩いた。

「俺も次の生徒会長を引き継ぐからね。今から少しずつ会長について勉強しているんだ」

「さすがセドリック君、凄いですね……」

勉強が苦手な俺としては尊敬しかない。

すると、セドリック君が苦笑する。

「学生のうちに魔術陣技師になるアルバの方が凄いんだけどな。自覚しろよ」

「起動する魔術陣を描けさえすれば誰でもなれるらしいですからねえ……そこまで凄くはないのでは？ トライする人が少ないだけで」

気楽に受験してね、なんてノイギア先生も言っていたし。

そう言うと、セドリック君が足を止めた。

どうしたんだろう、と思ったら、びしりと指を突き付けられる。

「凄いんだよ……僕も、アルバが簡単そうに製作しているからって、無理言って父上に紙とインクを用意してもらって、描いてみたことがある」

えっ。そうだったんだ！

うわあ、セドリック君が描いた魔術陣、絶対見てみたい。

そう言うおとした瞬間、セドリック君は突き付けた指を垂らし、そのまま頭を抱えた。

「でもあれは、無理だ！ 絶対に無理！ なんだよ器具も何も使わずに円を綺麗に描く必要があるって。あの文字一体なんなんだよ。わざと描きづらく綴られているようにしか見えないよ！ どう頑張っても、基礎の陣すら描けなかったよ！ 誰でもなんて、無理！」

しおしおの顔をして、セドリック君が嘆く。その声が人気がない廊下にも響き、思わず目を見開いた。

セドリック君がくるつとこっちを向いて、俺の両手を掴む。

「いいか、絵心がないと魔術陣なんて描けない。……実はジュールも少し練習したことがあったらしいけど、どう頑張っても正確な図形が描けなくて断念したって言ってたぞ。あと、多少は絵心があるって言ってたうちの家門のやつも挑戦したけど陣が発動しなかったらしくてさ、あれ正確に描けても発動するかどうかは資質があるって」

最後の言葉に、息を呑んだ。

「そうだったんですか……！ 知らなかった」

「知らなかったのかよ！」

ぶっは！ と噴き出したセドリック君の笑い声が、再び廊下にこだまする。

資質なんてあったんだ。だからあれだけ受験生が少ないのかな。

「じゃあ僕はラッキーだったんですね」

「ラッキーで済ますなよ。……でも、アルバが魔術陣技師になったことは、僕が父上の手伝いに王宮に行ったら、アルバと遊べるってことだよな！ そう思うと勉強が捗るよ」

俺の返事に苦笑して、でもブランコのように揺らしてから、セドリック君が俺の手を離す。

さつきとは打って変わってご機嫌になって弾むように足を進めるセドリック君の背中に向かって、俺はひっそりごめんなさいと呟いた。

俺なんかと会えることを喜んでくれるのは嬉しい。

でも、セドリック君が通うようになる王宮の建物と、俺が通う場所は違う棟なんだ。

だからほぼ会えないんだよね……

今それを言ったらこの喜びに水を差してしまいそうだから言えないけど。セドリック君とジュール君は同じ棟で仕事をするようになると思うんだけどね。

正直言えば、セドリック君とも兄様とも職場ではそんなに会えないと思う。でも兄様と一緒に王宮に通えるってだけで満足だから。それに加えてたまにちらつとお姿が見られればもうそれだけで満足だからね。今はほとんど会えないから余計に。

そう思うと卒業が待ち遠しい。

気分が軽くなって、俺も鼻歌を歌う勢いで、足取りを軽くしてセドリック君を追いかけた。

サロンに着くと、王宮の騎士たちが入り口を固めていた。

真面目な声で、セドリック君が彼らの前に立つ。

「生徒会から依頼を受けました、セドリック・ソル・セネットとアルバ・ソル・サリエンテです」
そう声をかけると、騎士たちは洗練された動きでドアを開けてくれた。

中に入ると、ヴォルフラム陛下とミラ妃殿下、ツヴァイト閣下と兄様が待っていてくれた。

「二人とも進級おめでとう」

部屋に入るなり、ヴォルフラム陛下がそう声をかけてくれた。

隣ではミラ妃殿下がとても楚楚とした笑みを浮かべている。

「ありがとうございます。ミラ妃殿下も、この度のご懐妊、おめでとうございます」

きつとお二人の子だから、可愛いに決まってるよね。

そんなことを思いながらお祝いを述べると、ミラ妃殿下は頷いてくれた。そんなわずかな行動にも妃殿下の気品が滲_{にじ}んでいて、俺は背筋を伸ばす。

勧められた席に腰を下ろすと、テーブルに次々豪華料理が並べられていった。前に新入生歓迎会の優勝特典で頼んだ特別なランチだ。

俺とセドリック君の前にも並べられていつて、俺はまた一つ、兄様とこのランチを食べるという夢を叶えることができた。もちろん前とは少しずつメニューは違うし、果物も今回はセドリック君の領地のものじゃないらしい。

「セドリックもアルバも遠慮せず食べてくれ。この特別メニューは私も学生時代に一度行事の優勝賞品で頼んだきりだったんだ」

「僕も昨年頼みました。その時はセネット公爵領の果物がメインだったんですが、本当に美味しく

て。何とかして兄様と一緒に食べることができないかと生徒会長に訊いたくらいです」

「そのような素晴らしい昼餐でもてなしてくださって、本当にありがとうございます」

ミラ妃殿下がおしとやかな所作でニコリと微笑む。

並べられていく料理は見た目にも華やかで、それでいて上品な飾り付けがなされていて、目にも楽しい。妃殿下がそれを見て「素敵……」と呟_{ささや}いているのが聞こえて、体調も悪くなさそうだとホッとした。

給仕してくれる人が一つ一つ料理の説明をしてくれる。その都度陛下は微笑を浮かべて「ありがとう」「美味しそうだ」「食べるのが楽しみだ」などと相槌を打っていた。これぞ上に立つ者という貫禄と優しさを兼ね備えたそのお姿には、学生時代に垣間見えた闇は見当たらなかった。

すべての料理が並ぶと、さっと部屋にいたお手伝いさんたちが退出していった。

端に立つアドリアン君を含む騎士数名だけが、このサロンに残っている。

その状態になった途端に、ミラ妃殿下の顔が緩んだ。

先ほどまでの微笑が、一瞬にしていつもの快活な笑みに変わった。

「やだアルバ君、制服が馴染_{なじ}んでるじゃない！ 最初に会ったときはあんなに小さかったのに」。でもアルバ君は最初から紳士だったわよねえ。ハンカチを貸してくれて」

ふわつと笑うその表情は学生時代によく見た顔のままで、ふつと肩の力が抜けた。

妃殿下は懐かしそうに目を細めていた。

「あの頃はまだ、アルバ君は『フオノン病』だったのでしょうか？ そう思うと感慨深いわよね

え……ねえ、オルシス」

「はい。あの頃の私は、アルバがずっと私のそばにいて、笑っていてくれることだけを考えていましたから」

声を掛けられた兄様がふわりと微笑む。その顔が尊くて、ウツと胸を押さえていると、それを見た陛下が苦笑した。変わらないな、とその口だけが動く。

ああほらせつかくの料理、食べましょ、という妃殿下の言葉で、俺たちは食事を始める。柔らかく煮た何かの肉が口の中で溶けてなくなってしまう。美味しい。

付け合わせの野菜もしっかりと味が染みていて美味しい。

ポタージュを品よく口に運んだ妃殿下も、目を輝かせている。

デザートも楽しみみだけれど、その前にお腹いっぱいになってしまいそうだ。

ね」とセクシーボイスで救済の手を差し伸べてくれた。俺はにやけるのを我慢しながら頷く。本当はこういう席で残り物を食べてもらうのはよくないんだけどね。

給仕が下がって部屋にいるのが陛下たちの護衛だから、お二人ともニコニコと頷いている。「こうして王宮以外で顔を合わせられて嬉しいよ。セドリックも、一年後には学園と王宮の往復

かな」

陛下の言葉に、セドリック君がニヤリと笑う。

「そうですね。頑張ります。そのころには僕の甥っ子、もしくは姪っ子も生まれているでしょ

うし」

「そうだな……戸籍部門がとても忙しそうだった。今年は婚姻ラッシュ、そして来年はベビーラッシュになるだろうな。アドリアンも今年の夏には婚姻を結ぶから」

なんてことないように話す陛下の言葉に、俺は首を傾げた。

ベビーラッシュ……って、あれか。次代の王の側近や妃にするために自分たちも同年代の子を作る流れがあるのか。

貴族って大変だなあ。いや、違う。そうじゃなくて……

「……アドリアン君が、結婚……？」

ようやくそのワードが脳に届いて、俺は時間差で盛大に驚いた。

そういえば、もう乙女ゲーム時代はとっくの昔に終わっているから、攻略対象者のそういう話もおかしくなかったんだ！

そうだよね！ 兄様は俺と婚約していて、ブルーノ君はルーナと婚約、ミラ妃殿下とヴォルフラム陛下がまとまった。もちろん他の人だって誰かと結婚したりするんだよね。

しかももれなくお子様たちは側近候補になるんだから、釣書なんてわんさか届いているんだろう。特に、アドリアン君とツヴァイト閣下は陛下の近くにいらんだからさらに。

ちらりと部屋の壁側に立つアドリアン君に視線を向けると、目が合った彼は口元だけをクツと上

げた。

ヴォルフラム陛下がそんなアドリアン君を見て、口を開く。

「お相手は侯爵家の令嬢で、昨年ここを卒業した才女だ。とても凛々しく剣が得意で、アドリアンと婚姻したらミラ付きの侍女になる予定だ。子が生まれたら乳母になる」

「なるほど……ある程度護衛もできる乳母なんですね。かつこいい」

「為人は悪くないぞ。ただ、ミラと一緒にするとたまに暴走するが」

「暴走……」

俺の呟きに、ヴォルフラム陛下の顔がフツと緩む。反対にミラ妃殿下が頬を赤らめて拗ねたように横を向いた。

「ちよつとヴォル、今ここで出す話？」

「でもこの二人はミラの本性を知っているから。……くく、あな、ミラの言うことにすべて反対するのを信条にしているような、とても癖の強い文官がいたんだ。それである日、ミラの主導で行っている書類を読みもせずに却下した。それで……ミラはその文官の政務室に乗り込んだんだ」
妃殿下の肘が陛下の脇腹にヒットしている。その気安い行動をほほえましく思いながら、俺は先を促した。

この話は絶対面白い一択。

ミラ妃殿下の暴走ってかなりすごいよね。さすがヒーロー。

ヒロインのはずなのに、俺の中ではずっと妃殿下はヒーローの立ち位置だった。

身乗り出した俺に、ヴォルフラム陛下は快活に笑いながら続けた。

「まずはその文官の顔に書類をたたきつけながら論破した。それでもその文官は反論してな。ミラはそのご令嬢と共にあつという間に文官の首に剣を突き付けた。そのまま啞然と見ていたハルスに『こんな話のわからないやつさつさとなんとかしなさいよ！』と怒鳴りつけながら。普通はミラを守るはずのそのご令嬢はミラと共に剣を抜き、一糸乱れぬ連携で文官を一瞬で無力化したそ
うだ」

私もその場にいたかった……と肩を震わせる陛下に、妃殿下の肘がもう一度決まる。ウグツと少し苦しそうな声が聞こえたのは気のせいでありたい。

でも、陛下の気持ちわかります。目の前で見たいよねそういうの。絶対にすっきりするやつ。

「その話には続きがあつてね」

目を輝かせていたら、兄様が口を開いた。

「その文官は、セネット家の家門で、色々と移動が難しい者だったんだよ。仕事自体ははじめにやる男で、セネットの家門としての誇りも持つ——むしろ不正は摘発する人だったんだ。けれど、ミラ妃殿下のことはどうしても市井上しせいがりで見下していたんだ。怒鳴られた父上は溜息を吐きながらセネット公爵に相談に行っていたよ」

「うわあ……」

義父も大変だった。

ミラ妃殿下は遠い目をして、あれは悪かったわよ……と呟いている。

結局はその文官は、セドリック君のお父さんが責任をもって再指導することになったらしい。
俺は顛末を聞いて、深く頷いた。

「一人が悔り始めると、周りは感化されますから……妃殿下が辛くないように動かれるのが一番だと思います」

俺もその辛さを知ってるしね、とは言わないけど。

兄様が、俺の言葉に少しでもだけ表情に憂いをのせた。

「まあまあ、それは済んだ話！ もう忘れて！」

ぱん、とミラ妃殿下が手を叩いて強引に話を終わらせた。恥ずかしい話だったらいい。俺にとつてはとてもスカッとする話だったんだけど。義父は、ご愁傷様……ってことで。

「このところ王宮から動けなかったからアルバ君の元気な姿を見て気晴らしするために来たのよ」

「でも今大事な時だから、あまり身動きしない方がいいのでは……？」

俺の言葉に、ミラ妃殿下はウツと顔を顰めた。

「そう言われて軽く軟禁されかけて、ヴォルに泣きついたの。そろそろお腹の子も安定するからいいですよ。歩きもしないと余計に健康に良くないって、市井では言われているのよ。ずっと寝ているなんて、むしろ害しかないわ」

そうなのかな。

妊婦さんの知識は俺にはまったくないけれど、母子ともに健康ならそれでよし。

でも、こんなんじやヴォルフラム陛下、気苦労が絶えないだろうなあ。

思わず同情の目を向けると、陛下がその視線に気付いて苦笑した。

「初めての子だからな。私としても、無事生まれてきてほしいし、ミラには元気でいてほしいよ」
フワリと微笑んだ陛下は、心からミラ妃殿下を案じている表情だった。

よかったなと改めて思う。

兄様たちが高等学園に入学してから五年。本当に色々なことがあったから。

陛下がアビスガーディアンにやられて瀕死になったり、国の大事な宝玉に魔力を込めたり壊れそうになったり。そして、王位交代があつて妃殿下と陛下がくつついたり。

俺が知っていたストーリーなんかよりも、現実のほうがよほど激動だった。

「実は今、市井でこの学園への進学希望が殺到しているんだ。まだ市井の生徒枠を拡大することはないんだが、今の五人がしっかり未来を示せば、さらに枠を拡大することになるだろう。そこで問題になるのが、市井の女性が入学した場合の対処だ」

今までのことを振り返っていると、ふとヴォルフラム陛下が真面目な表情になり、声を落とした。来年度、つまり、長期休暇が終わり、俺たちが二年生になった時に入学する生徒のことだ。

市井の生徒の中に、女性が一人いるんだそうだ。市井の学校からぜひにと推薦を受けた子らしく、試験をかかなりの高得点で合格したという。

俺はその、ヴォルフラム陛下の様子にピンときた。

——ここで問題になるのは、多分恋愛の何かなだ。

つまり、男子生徒が入ってきた場合は、純粹にその能力を見てもらえるけれど、逆の場合はそうはならない。もし、誰か貴族子息が市井しせいの女子生徒を見初めた場合、手を出すだけ出して後は捨てるとかやる場合もあるかもしれないのだ。

「確かに、対処を間違えたらせっかくの政策が潰れてしまいかねないですね」

セドリック君が真顔になつて唸る。

同じ学年ならまだしも、下の学年だからフォローも難しいのかな。俺たちの代に市井しせいの生徒を入学させたのは、セドリック君がいたからなので、こちら辺は動かさなければいいけれど。

俺、下の学年の人たちのこと、ほとんど知らないんだよなあ。

貴族の子供たちは小さいころからその家門で交流とかしているから、ある程度の把握はしているみたいだけれど、俺の場合そこら辺はまるっと省いちゃったから。これに関しては俺は力になれるかわからないよ。

「とりあえずヴォルフラム陛下の政策だというのをうるさいほどに伝えますね。あとは頼りになりそうな女子を一人二人ほどそばに置いて……」

「頼む。不便があれば教えてほしい」

「わかりました。受け入れてみないとうなるかわからないので難しいところですが……僕たちの学年の者たちはとても勤勉で真面目だったので、推薦される人柄などを見てその都度なんとかしてみます」

「頼りになるな、私の義弟は。ただ、ミラが同じく市井しせい出なので、もしその生徒がミラのような展

開を期待していたとしたら……」

「きちんと否定できるよう、否定しても学園内であれば問題ないということを少し徹底する必要がありますね」

陛下とセドリック君の会話に、ああ、そういうのもあるんだ、と眉を寄せた。

恋愛未満だった。誘いを断つて不敬だと言われたら、なんて考えたら断ることすらできないで、好きにされちゃうかもしれないってことか。

ミラ妃殿下が市井しせい生まれだというのは広く知られている。

フレッド君が話していたように、入学時点から貴族の愛人を目指したり、シンデレラストーリーを夢見たりする子もいるかもしれない。

その場合、とても学園内の人間関係が拗こじれるし、学園内で問題が起こって、市井しせいから来た女の子が妊娠しちゃったりとかしたら、折角広げた門戸をまた狭はめなければいけなくなるかもしれない。徹底したくてもどこにでも考えが浅はかな人はいるわけで。……悲しいことに、特に俺の学年には。

ミラ妃殿下の場合、庶民のままで生徒になったわけではなくて、セネット公爵家の養子になったからこそ、問題なく国母となったわけだけど、これが庶民のままだったら絶対に無理と言わざるを得ない。うちの母が男爵家から公爵家に嫁いできたのだから義父がごり押ししたからこそできたことで、普通はあり得ないことなんだ。王女だって降嫁できる家柄なんだから。

その差がわかっていればいいんだけど……

市井^{しせい}からの生徒の受け入れは陛下が即位してからの試みだから、公爵家嫡男のセドリック君と宰相の子息ジュール君の在籍する学園でお試しするのは時期的にとってもいいとは思っただけだね。

それにしても、公爵家嫡男に宰相子息、公爵と血の繋がらない公爵次男、そして学生のうちに公爵家にその頭脳を認められた市井^{しせい}の男子生徒……それだけ見たらなにやら、乙女ゲームでも始まつてしまいそうな雰囲気さえある。

なんて、そんなことはあるはずがないけど。

そこまで考えてこっそりヴォルフラム陛下を見る。

陛下は穏やかな視線でこちらを見ていた。

ちよつと不埒な方向に傾いた思考を慌てて引き戻す。

……そうだ。

ミラ妃殿下のシンデレラストーリーがあつたのはもちろんだけど、俺だつてしがない男爵家の血しか流れない状態から、公爵子息になった。しかも義父とはとてもうまくいつている。

だから、なんというか、端的に言えば成り上がれるのでは、と思われる要素が今の学園にはたんまりある。

つまり、格好いい若い高位の男性はヒロインに狙われるに違いない――

なんてね。

乙女ゲームは、もうエンディングを迎えたんだよ。攻略対象者だつてかなりまとまっているし……

そこで俺はふと顔を上げた。

まとまっていない人、目の前にいた。

「こうなつてくると、ツヴァイト閣下も釣書とか山になつてそうですね……」

思いつきが口を突いて出て、ハツと口を押さえる。

こういうのは俺たちが口を出しちゃだめなやつだった。

「アルバ鋭い」

しかし、閣下は俺を咎めるでもなくニヤリと笑った。

「山のような釣書が来るのがほんとウザくてさあ……まだ相手から了承を得ていないからここだけの話だけど、俺、結婚打診してるんだよね。お気に入りだった子に。だから釣書はすべてお返し中」

ツヴァイト閣下の言葉に、俺は目をまん丸にした。

ええっ、ツヴァイト閣下のお気に入りの子？

学生時代はそういうのを絶対に作らなかつたのに、お気に入りなんていたんだ……

まずそっちに驚いてから、そして打診中つてことはまだ色よい返事をもらつてないんだということに驚いた。

人柄は悪くないし、家柄も三公爵の一つの当主だし、王子だから子が生まれたら王位継承権もわづかながら発生する。そんな彼を夫にすることになると悪いことなんてなさげなのに、どうして色よいお返事をもらえないんだろう。

もしかして、陽キャが嫌い、とか……？ 性格が合わないと思われてるとか……？

まじまじと閣下の顔を覗いていると、閣下もテーブルに身を乗り出して「おい」と俺の顔を鷲掴みした。秒で兄様に払いのけられていたけれど。

周りにダイヤモンドダストが散っていて、兄様は今日もキラキラとても綺麗。

「どうして地位も金もある格好いい俺が、まだ打診中なのか、疑問なのはわかった」

「自分で言っちゃうんですね」

苦笑すると、だってほんとのことだろ、と胸を張られてしまった。

「案外俺の相手を探すのは難しいんだよ。新しい派閥のはずなのに、サリエンテ家に近いだろ。まずはサリエンテ家のマイナスにならないご令嬢を選ばないといけない。そして、公爵夫人としてしっかりできる女性じゃないといけない。俺が初代になるから、手伝ってもらえる夫人もほばいない」

そう言われて合点がいく。

「ああ、そうですね。うちの母は元々下位貴族出身ですし、セドリック君とジュール君の母君も難しいですし……」

「なによりミラ妃殿下が市井^{しせい}の出だから、俺が娶^{めと}るご令嬢によつては、国が大変なことになる場合がある。それを少しばかり悩んでるようだ。だから、まだいいよって言ってくれないんだ。むしろ俺の嫁になった方が、あの子も楽しいと思うんだけどねえ。俺も楽しいし」

ツヴァイト閣下にそこまで言わせるご令嬢って誰だろう。

というか、目先の利益に目が眩^{くら}まずに、そこまで迷ってくれる令嬢ってすごいんじゃない？ 首を捻^{ひね}って兄様に助けを求めると、兄様は意味深に微笑んで口元に人差し指をそっと当てた。その仕草だけで、ツヴァイト閣下のお相手のことは俺の頭から吹き飛んでしまった。

二、初めてのお仕事

修了式が終わり、長期休暇に入った。その休みを利用して、俺は王宮へ通うことになった。すでに魔術陣技師として王宮に所属しているから、長期休暇では業務に参加してもいいんだって。俺が休みでも兄様は義父とともに王宮に通っているの、ご一緒させてもらうことにした。職場がどんなところなのか、ちよつと気になるの、いい機会だ。

朝早く、兄さまと義父と馬車に乗り込む。

三人とも向かう棟は違うけれど、馬車を降りる場所は一緒。大きな門から裏に回ったところだ。

「一緒に行こうか？ 一人で大丈夫？」

兄様に心配げに見下ろされて、俺はにっこにこだった。こうしてまた朝一緒の馬車に乗ることができるのが嬉しい。

心配してもらえるのも心がとても温かくなる。兄様優しい。女神かな。あ、女神だった。

「大丈夫です。ノイギア先生も出勤しているらしいです。手紙を送ったら待っていると云ってく

れましたし。新しい魔術陣を覚えたら、兄様のために役立てますね！」

ぐっと手を握ると、兄様がそっと俺を抱きしめてくれた。

兄様の柔らかな銀髪にそっと頭をすり寄せる。すると義父の優しい声がかかった。

「ほら、オルシス、遅れるぞ」

「わかりました。父上、後で陛下と向かいますね」

「ああ」

兄様に声をかけ先に馬車を降りた義父は、俺に視線を向けると、すっと目を細めた。兄様と同じ、慈愛に満ちたまなざしだった。

「アルバ、無理はするんじゃないぞ。何かあったら、私のところに来なさい。それともし、魔力の暴走があったときは周りの者に私かオルシスを呼んでもらうよう伝えることを忘れずにね」

「はい」

返事をする、義父は微笑んで一つ頷いた。

兄様と義父の向かった棟とは違う『西棟』と呼ばれる建物に足を踏み入れる。廊下を歩き、階段を上り、今日から俺が所属する部屋の入り口の上側に掲げられているプレートには、『魔術陣技術省魔術陣記述製作室』と、仰々しく部署名が掲げられていた。

通称は『魔術陣製作室』というらしい。

俺が試験を受けたときに来た部屋だ。

ドアをノックすると、中から聞きなれた声で返事があった。

「いらつしやいアルバ君！ 長期休暇お疲れ様でした。今度は二年生なんですってね。もし飛び級があれば受けてもらって即卒業してほしくらいです」

俺を招き入れたのはノイギア先生だ。昨年ずっと俺の魔術陣の家庭教師をしてくれた先生は、とんでもないことを言い始める。

「無理ですよ。僕そんな頭よくないですもん……」

あははと笑って否定するも、ノイギア先生はまたまた「というような顔つきをしている。本当だつてば。」

俺は持ってきた鞆をぎゅっと抱くと、ノイギア先生も表情を真面目なものにして俺を見た。

「早速今日から仕事の説明をしてもいいんですよね？ それとも今日は見学だけにします？」

「夜に兄様たちと一緒に帰ることになっているので、少しずつでも仕事を教えていただけたら嬉しいですよ！」

「さすがです。向上心にあふれている若者は大歓迎ですよ」

ノイギア先生だつて若い方に分類されるのに。

そう思いながら後をついていくと、試験の時も座った立派な机に案内された。

広いフロア内で、執務室にあるような立派な机が全部で十二、並んでいる。そのうちの上に何も載っていない机が俺の席になるようだ。後ろ側には、試験の時と変わらずにずらりと魔術陣の本が並んでいる。業務の際には、皆思い思いにそこから机に運んできては参考にするらしい。

「この部屋は、既存の魔術陣を仕上げる部屋です。他にも依頼のやり取りをする部屋と新しい魔術陣の開発をする部屋なんかがあります。この階ワンフロア全部魔術陣技術省の管轄です」

「そうなんですね」

俺が答えると、ノイギア先生が天井を指した。

「この上のフロアは記録書記部署の待機場所兼清書する場所で、下のフロアが情報記録調査部の場所です。下の部屋に行くときは気を付けてくださいね。たまに記録簿が崩れているので」

「ええ……」

なんとなく部屋がどんなことになっているか予想がついてしまう。

紙だもんね、全部……

俺の反応を見て楽しそうに笑いつつ、ノイギア先生が今度は俺の前にある机を叩いた。

「そして、こちらの上の引き出しに魔術陣用の特殊紙が入っています。インクは隣の部屋にたくさんストックがあります。もしストックがなくなりかけたら、外注をかけないといけないので気付いたら教えてくださいね」

「はい」

「あとは……昼食は、この棟の一番下に食堂があるので、後で一緒に行きましょう。ここで働く人は基本無料。でも一人分では足りない場合は料金が発生します。デザートが美味しいと評判なんですよ」

ノイギア先生はにこにこ一気に説明してくれた。

「終業の鐘が鳴ったら、ここを施錠して全員退勤となります。……でも依頼が大量に来た場合は手分けして納期までに仕上げます。その場合ちゃんと特別手当も出ますし、年に一回か二回くらいしかそんなことはないので、安心してくださいね」

なるほど。基本残業がない、というのはすごく良い職場だ。

まあ……試験の時に俺を迎えてくれた先輩たちを見るに、もしかしたらそんなことはないのかもしれないけど。

俺がうんうん頷いていると、ノイギア先生が天井に視線を向けた。

そして、あと説明が必要なのは……と呟いてから、手を打つ。

「あとで室長室に連れていきますね。室長に挨拶しましょう。ちょっと顔は怖いかもしれませんが、怖い人じゃないから大丈夫ですよ」

そう言われて、そういえばこの代表の人には会ったことがないということに気が付いた。それにしてもノイギア先生、去年から思ってたけど、俺のことかなり小さな子供だと思ってないだろうか。扱いが子供……

大丈夫ですよ、これでも十六歳なので、と言おうとしたところで「お疲れさまです！」と少し高い声が室内に響いた。

やってきたのは、どこか見覚えのある人。こげ茶で緩くウェーブのかかった髪を後ろに流して、同じような色の瞳に生真面目そうな雰囲気を感じた人だ。

「あの時の子供……？」

そんな呟きが聞こえて、俺と一緒に試験を受けて最初に教室を出て行った人だったと気付いた。
ノイギア先生が彼を見て、パツと笑う。

「あ、フォル君！ おはようございます。今日はアルバ君が初出勤ですよ。ですので、フォル君の
時のように皆で歓迎会をしませんか」

「おはようございます。フォルトナー・ドウラツケンと申します」

「アルバ・ソル・サリエンテと申します。今日からよろしく願います！」

見た目通り真面目そうに頭を下げた後、フォルトナーさんは隣にいたノイギア先生にジト目を向
けた。

「ノイギアさん……歓迎会って……僕が入ったときみたいにならざるんですか……!? やめてく
ださい！ 後片づけが本当に大変すぎて、最悪だったんですから！」

「えー、じゃあせめて大きなケーキだけでも頼みませんか？ ほら、皆で切り分けて食べたらとて
も良い関係になれると思うんですよ」

「大きなケーキって……それを喜ぶのは、小さい子だけでしよう！ ここは職場ですよ！ ほら、
後ろの新人さんも引いてますから！」

「君も新人なんですけどね」

「じゃあせめて新人に注意されないように行動を自粛しましょうよ……！」

すっかりもうこの場所に馴染んだように、彼は両膝に手を当てて、息を荒げている。

どうやら子供扱いなわけじゃなくて、ノイギア先生は周りすべての人に同じ対応だったみたいだ。

さつきも甘いものを勧めてきたし、ノイギア先生はただ甘いものを食べただけの人なのかもしれ
ない。

いわれてみれば、離宮に教えに来てくれていた時、ミラ妃殿下が出してくれたお菓子をとても嬉
しそうに食べていたような……

口を尖らせるノイギア先生から視線をそらして、俺は先生を叱りつけているフォルトナーさんに
目を向けた。

魔術陣関係の部署に所縁あるスキッド侯爵家一族の分家で、ドウラツケン子爵家のご子息。

フォルトナーさんの家名の方が偉そうな響きだな、なんて思ったのは内緒だ。後で覚えていられ
る気がしない。

初日の自己紹介で早速ノイギア先生にフォル君と呼ばれ始めて、今はすっかりここではフォル君
に定着してしまったと、ちよつとだけげんなりした様子で本人が教えてくれた。

ここでは家名を名乗らなくていいそうだ。

そこらへんはちよつと気楽だなと思った。

フォルトナーさんは、兄様たちより一つ上の、二十一歳だった。学園を卒業してから、家で魔術
陣をひたすら勉強して、発動させることができたから受験しにきたって。

さすがに学年が違っていると、兄様のもとに通っていた俺のことも噂でしか知らなかったそうだ。

俺がざつとここに勤めることになった流れを説明すると、フォルトナーさんは何度も頷いた。

「ラオネン病が完治する病気になったというのは聞いていましたが……本当なんですね」

「はい！ 兄様とブルーノ君のおかげです。お二人が薬の開発に力を入れてくれたので、こうして生き永らえることができました」

そう胸を張って言うと、フォルトナーさんがぴたりと動きを止める。

「新薬開発……あれ、待って、お二人、いつも学年で主席と次席を取りながら総会への参加を蹴ったことだから有名だったような……」

そう言われて、そっと視線を逸らす。

「そういえばありましたね。ツヴァイト閣下とアドリアン君には大分ご迷惑を……」

「あのお二人が総会に入っていましたからね……」

そう言われて、俺は目を瞬く。

「フォルトナーさんは総会などには……？」

「僕は入りませんでしたよ。やはり学業よりも魔術陣を勉強したかったので。学業はそこそこです」

そう言いつつも、フォルトナーさんはやっぱり頭がよく見える。

結局、フォルトナーさんはノイギア先生よりもよほど詳しく室内の説明をしてくれた。

説明を受けている間に、もう二人ほど増えて、改めてご挨拶をする。

全員がそろったのは俺が来てから一時間ほど経ってからだった。

十二人分の机に人が座り、お隣に腰を下ろしたフォルトナーさんがぐると部屋を見渡す。

そして俺に視線を戻した。

「こんな感じで、この部屋はこの十二人で使います。アルバ君がいないときは十一人。少ないですよ。でも魔術陣は、魔力がなくても使える技術、犯罪にも結びつく技術です。だから、おいそれと人員を増やせないのが現状なのです。何より才能がものを言いますしね。……才能のない人はどれだけ練習しても使える魔術陣を製作できないのですよ」

だから激務を覚悟してくださいね、と笑顔で言われて、ほんの少しだけ身体を引いてしまう。

もしかしてここはブラックな職場なのか。でも、さつき通常、業務時間以外はここを施錠するって言ってたし、よほどのことがない限り残業もなさそうな口ぶりだったけれど……

ちらりとフォルトナーさんに視線を向けると、彼はそっと目を逸らしていた。

とはいえ、業務終了時間と兄様たちの仕事が終わる時間には差があるので、それをどう潰そうと思っていたから、適度な残業は悪くない。そう思ってしまうのは、前世がサラリーマンだったからかな。

「よろしく願います！」と大声で言えば、全員からなんだか戦友を見るような表情で見られてしまった。

その後室長室で紹介された室長は、ノイギア先生が言うように、ごつい身体つきの厳^{ひが}つい顔の人だった。ただ、描き上げる魔術陣は繊細にして美麗、効果も高く、外見詐欺といわれるそう。……ちよつと可哀そう。

「体調は大丈夫なのか？」

開口一番、室長はそう訊いてきた。

睨みつけるような表情だったけれど、それが素の顔らしい。後ろでノイギア先生が「あれで心配している顔なんですよ」と呟いていたし。ノイギア先生のそんなフォローにも呆れたような顔を向けるだけだったので、室長はいい人なんだろうな、と思った。

俺はズボンに入った線に指を添わせるようにして、深く頭を下げる。

「本日から短い間ですが、どうぞよろしくお願いします」

「体調悪いときは無理するな。もし途中で体調が悪くなったらサリエンテ公を呼ぶように仰せつかっている。早めに自己申告してくれ。俺の首が物理で飛ぶ」

「父様はお優しいので、そんなことしないでしょ」

室長の冗談に思わずツツコむと、室長はさらに苦いものを食べたような顔つきになった。

「……あの方を優しいと言える人物なんざ、俺に扱える気がしねえんだが……ここは魔術陣を描く実力だけがものをいう場所だ。爵位とか絶対に考慮しないから覚悟しておけよ」

「はい。頑張ります！」

気合いを入れて返事をする、やつぱり室長は何やら苦いものを食べたような顔つきになった。

部屋に戻ると、前面にある黒板にたくさんの紙が貼り出されている。さっきまではなかったから、朝一で貼り出すってことかな。

フォルトナーさんがそつと説明してくれた。

「ここに貼られているのが今日のノルマです。これがなくなると、今日の業務は終わりととなります。

今日は比較的少なめですね。内容は気にせずに。すでに精査され、問題なしとされたものがここに来るので」

「はい」

周りの人たちは、すでに机に座って魔術陣製作を始めている。

フォルトナーさんも席に着くと、依頼票を手に魔術陣を描き始めた。

俺も慌てて黒板をざつと見渡す。結構な種類の魔術陣製作依頼があった。

こんな感じなんだと感心して見上げていると、立ち上がったノイギア先生が近づいてきて、黒板の端の方から二枚の依頼書を手に取った。

「これは常に必要な水の魔術陣と、属性を調べる魔術陣です。こちらの属性調査用は上級に分類されるのもう少し職場に慣れてからお願いますと思いますが、こちらの水魔術陣は下級です。ちようどいいのだと思います。基本に忠実であれば大丈夫なので、お任せしてもいいですか？」

「はい」

ノイギア先生から依頼書を受け取りながら、他の依頼書をちらりと覗き見る。

手元の依頼書にはどこ部署とも書かれてはいないけれど、他の依頼書には必要な部署名と枚数が必ず書かれているようだ。

もしかして、何に使うのかもしっかりと明記しないと魔術陣を作ってもらえないのかもしれない。うちで手軽に転移の魔術陣を使っているけれど、本当はあれはよくないのかな。

首を傾げながら視線を動かしていくと、ふと王宮専属医師からの依頼が目についた。

俺が前にミラ妃殿下にあげた疲労回復の魔術陣の発注のようだ。
使用目的が『妃殿下の体調管理のため』となっている。

む、と口を尖らせる。

もしかしてミラ妃殿下、これを使わないといけないくらい疲れてるのかな。妊娠初期は母体に負担がかかるとうけないっていうし……

「ノイギア先生、あの、先にこっちの依頼を受け持ってもいいでしょうか？」

ついその依頼を指さすと、ノイギア先生はぱくりと瞬きした。

「これ、上級魔術陣ですよ。しかもほとんどここでは扱ったことのないものですが」

その言葉に深く頷く。

「これなら描いたことがあります！ だから大丈夫です。妃殿下のご体調がよくなるんですよか」

「そんな話は聞きませんけど……まあ、安静にしていけないといけない時期ですから」

「そうですね。無理なさらないといいいのですが。しかもこれ、今日の正午までの依頼なんですな。

緊急じゃないですか」

そんなに体調がよろしくないのかな、と心配になつてその依頼書を手に取る。

「あ、アルバ君……」

おろおろとした様子のノイギア先生を見て、ハツとする。

ついでにこの部屋にいた全員が俺に注目していることに気付いた。

「初出勤で上級魔術陣……」

誰かの呟きが耳に入る。あ、もしかして、新人としてとても生意気だったんだろうか。

それはよろしくない気がする。

でも全員がすでに何かしらを手掛けているってことは、この依頼は後に回されるってことだね。それともノイギア先生の仕事だったのかな。それは、よろしくない。

俺は恐る恐るノイギア先生に聞いた。

「これってもしかして、ノイギア先生の仕事でした？」

「いいえ、誰とは決まっていませんですよ。ただ、今日初出勤のアルバ君に最初から上級魔術陣をお任せするなんて、我らがどれだけ鬼畜なんだと誰に言われてもなんの反論もできません」

眉をへによつと下げたノイギア先生の言葉に、なるほど納得と頷く。

でも、いつもうちで描いているのと同じだから、時間はかからないはずだ。

「じゃあ、もし失敗したらノイギア先生にフォロワーしてもらえたら嬉しいですよ」

「それはもちろんですが……」

心配してくれるのはとても嬉しい。でも、時間も押しているし、とりあえず描いちゃおう。

そう思って、いまだに注目を浴びている視線を吹っ切るように、割り当てられた席に着いた。

広い机はとても描きやすい。椅子の高さがちゃんと調整できるのが、チビの俺にはとてもありがたい。

インクを出して紙を出して、最初の一文字を描く。

途端に魔術陣に集中できた。

「よし、でき上が……り？」

描き上げて顔を上げた瞬間、俺の机の周りに皆が集まっていることに気付いた。

うわ、集中しすぎて気付かなかった。

「何も見ないで描き上げたぞ……」

「しかも丁寧かつ繊細だ」

「どうやったらこの歳でここまでの技術を……」

「もっと基礎から教えないかと思っていたが」

周りが騒がしい。

そういえば魔術陣技師の技術って、その家に代々伝わる感じだったんだっけ。

ぼっと出の俺が異物なのか。

ごくりと喉を鳴らしながら周りを見回すと、目が合った年配の方が目を細めて苦笑した。

「ああ、すまない。最初の仕事から上級魔術陣を描き始めた新人など初めてのことでね。驚かせてしまっただろう。ほら、皆散った散った。ここでは他の者を邪魔するのはご法度だ」

「『はー』『うん』」

号令とともに、周りにいた人たちがわらわらと自分の席に戻っていく。

その集団の中に、ノイギア先生もフォルトナーさんも混ざっていたことに笑いたくなった。

ここはとても居心地がいいかもしれない。

学園で向けられるような視線を向けてくる人が誰もいないのだ。

嬉しくなって思わず頬を緩めつつ、描き上げた魔術陣を手に席を立った。

さて、これはどこに提出すればいいのだろう。

そう思ったけど、周囲は皆また集中して、静寂を取り戻している。

……もう少し別の魔術陣もやってしまおうかな？

そう思って、俺はまた集中の海に飛び込んでいった。

「さて、お昼の時間ですが、アルバ君、お昼は……」

水の魔術陣も描き上げたあたりで、ちょうどノイギア先生が声をかけてくれた。

けれどノイギア先生がすべてを言い終わる前に、ノックが響き渡る。

入り口近くの人が対応していたので椅子から立ち上がったところで、後ろから「アルバ」と俺を呼ぶ兄様の声が聞こえてきた。

「兄様！」

振り返ると、入り口から兄様が俺に向かって手を振っている。

職場で！ 兄様と会えるなんて……！

兄様はいつでも忙しいから、ここに来てくれるなんて思ってもみなかった。

「陛下から許可を得たから、アルバを昼食に誘いに来たよ」

「本当ですか！ あ、ノイギア先生、お昼は……」